

# 「<sup>たまゆら</sup>玉響の青春」に寄せて

私達は、古稀を過ぎ満七十歳を迎えた。

顧みれば、昭和22年4月、六三三制度の実施により、岩手中・高等学校で学窓を共にした時間は、人生の十分の一にも満たない短いものであった。しかしながら珠玉の友との生涯を通して熱い思いを触れ合わせ切磋琢磨し、学び、遊び、目的に向かってさわやかな音を奏でた青春の日々であった。それが今までの人生の活力にもなってくれたと想う。

藤澤 祐三

題字 小泉 仁左衛門

## 新明解国語辞典(三省堂)

たまゆら④(副) ⊖〔雅〕〔もと、「玉響」の意。この語形は万葉集の旧訓に基づく〕幾つかの玉が触れ合って出す音。「漢字と漢字のつらなりは固そうに見えますが、かえり点を打ってゆっくりと味わってみますと、一語一語が珠玉のように光ってそれがふれあうたび、一のささやかな音をたてます」  
⊙過ぎ去ってみれば、その状態がほんの短い間のことであったことを表す。「ある不安定な足場の上で一の冒険を楽しんでいたに過ぎない/ああ、一の幸福も今日で終わった/春が来たら治るだろうと信じているからうれしい。治らなかつたらどうするか、そこまでは考えていない。考えないことによつて女は一の平和を得ている/一の青春」